とが出来ない、読後感の誠にすがすがしい、印象深い一書である。鍼灸研究者はもちろん、医史学研究者だけでなく、同時代人に広く推奨できる好著といえる。

（杉浦　守邦）

本書は鍼灸学界の最高リーダーである著者が九十歳を過ぎ（一九一三・大正二年生まれ）四十歳代までの活動期を「青春篇」と一括し「自叙伝」の形式をとって、斯界の歩みを懇切叮嚀に「中外日報」に九カ年にわたり連載されたものを一書にされたものである。

著者の言を借りれば「私の生涯は鍼に始まり鍼に終わるといっても過言ではない」そして「ほかのものは、それに栄養を与え、成長を促し、修飾したものと考えることができよう」と。中心軸をあくまでも「鍼」であり、方向は一貫しており、「学」の在り方を簡潔に述べておられる。

（目次）

はしがき
第一章　幼稚園・小学校時代
第二章　中学高校時代
第三章　大学時代
第四章　勤務医時代
第五章　軍医時代
第六章　厚生技官時代
第七章　盲学校専任医師時代
第八章　ヨーロッパ出張時代
略年譜

各章を読み進めるに従い、著者の、出しゃばらない、しかも健全で生真面目な性格に裏打ちされた生活意欲と学究の方針が随所にちりばめられていることが沸々と伝わってくる。

御両親の生き方がそのまま受容され、「鍼の道」を一貫された。京都帝国大学医学部において内科医への道を学ばれ、その間体育の錬成に力め（柔道・短艇）、軍務に従っては南方戦線において死線をのり越え、内地帰隊後も病魔に犯されつつも一意任務を遂行された。これらの記事の行間には、戦前の学校教育、軍隊経験者にとっては筆舌に尽せぬ意味合いが秘められ、また軍部の戦術・戦略の動揺ぶり等が指摘されていることを認識されることであろう。

戦後官舎を出て京都の自宅に移り、家業継承を決意し、父の指導下に鍼術を追究されているが、昭和二五年の鍼灸医療に関する石川日出雄博士の米軍との対応の記事は迫力を以て記されている。以降、盲学校医師時代の詳細な記述は注目されるものであり、日本の盲教育の「原典」として理解されるべきであろう。かねて関係諸氏の「鍼灸人物辞典」とも言えよう。

「ヨーロッパ出張時代」の記事は、出張費に関する蜷川知事（京大名誉教授・経済学博士）の英断について特筆に値するものであることを指摘するとともに、著者の堪能なドイツ語力が活かされて諸学者との交流に成果を上げられたことが「国

際会議」参加の真の姿を如実に伝えている。

表紙カバーの京都大学時計台の姿絵は、著者が心から京大を愛し青春を想い、いつくしみの心をもっていつまでも見つめている御気持が伝わってくる。また近影の温容からは暖かな御心ばえが感じられる。

本書の特色は、著者の抜群の該博・正確な記憶力と記録の整備、社会動向に対する適確な透視力、何物にもおもねない積年の強靱な意志力と、何よりも人を愛する心に支えられた暖かみに包まれたものであることである。また澱みのない流暢な筆力によって構築されている。「近現代史書」でもあり、今後に活躍する青年世代には是非とも座右に備え味読していただきたい書であることを強調しておきたい。

なお「壮年篇」の出版を期待し、著者のさらなるご健勝を祈るものである。

（末中　哲夫）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、二〇〇四年九月一日、三七四頁、A五判、定価二九四〇円〕

編集後記

多事多難であったこの一年も、ようやく終わろうとしています。本学会にとって、本年の最大の事件は、学会誌の刊行などを依頼していた学会事務センターの破産である。▼前号の編集後記で、本学会への影響などをお伝えしたが、その際に、学会事務センターに預けていた四一万円ほどの預かり金が返還不能となる見通しとお伝えした。その後この預かり金は、未払いであった医史学雑誌の本年第二号の出版費用と相殺されることになり、学会の実質的な被害はなくなることになった。不幸中の幸いである。▼多事多難は、学会だけのことではない。国立大学は独立行政法人となり、大学病院は研修医の必修化にさらされ、医療情報の公開など医療の場も厳しさを増している。来年の医史学会総会（六月二五～二六日）では、学術会議との合同シンポジウム「人をみる医師を育てる――医学史・医哲学を現代の医学教育に生かす」が開催される。医史学を若い人たちに伝える試みとして、多くの会員の方たちの来場を期待しています。▼多事多難の中で、医史学雑誌も本年の最終号の発行にまでこぎ着けた。原著論文三編、研究ノート一編、資料三編を掲載することができた。しかし原稿の投稿中が少なく、第四号の内容を決めた一〇月二二日の編集会議の時点で、審査中の原稿の在庫がなくなってしまった。会員のみなさんからの積極的な投稿を、重ねてお願いします。

（坂井　建雄）